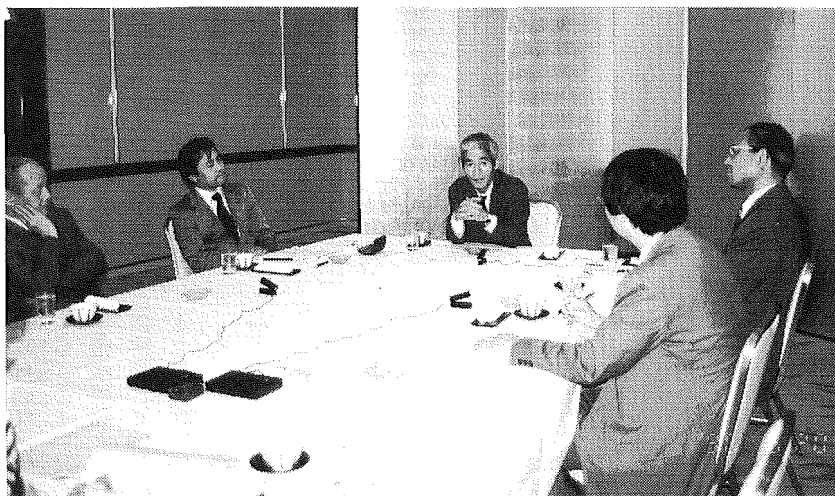


日本の文化を語る

第8回

「神道と現代宗教」



西山 茂（にしやま しげる）

一九四二年埼玉県生まれ。東洋大学社会学部卒業。東京教育大学大学院博士課程修了。現在、東洋大学社会学部教授。同社会学部部長。専攻、宗教社会学。著書、『現代人の宗教』（共著・有斐閣）

櫻井治男（さくらい はるお）

昭和二十四年三月五日生まれ。皇學館大學院修士課程。現在、皇學館大學教授。専攻、宗教学・祭祀研究。著書、『蘇るムラの神々』（平成四年・大明堂）

石井研士（いしい けんじ）

昭和二十九年八月十三日生まれ。東京大学人文科学研究科博士課程満期退学。現在、國學院大學助教授。専攻、宗教学。著書、『銀座の神々―都市に溶け込む宗教』（新曜社）など。

司 会

上田賢治
阪本是丸

神前結婚式にみる現代の神社

阪本 本年は神社本庁が設立されて五十年、あるいは多くの神社庁が設立されて五十年に当たります。そうした節目の年でもありますし、これは余談ですが、明日には東京都神社庁でも設立五十周年にあたって、神社神道の未来を問うような形で、「これからの神道はどうあるべきか」というふうなシンポジウムが予定されております。そこでこの会では現代社会における今日的な神道の状況について、従来は今日的な問い掛けよりも、むしろ歴史的な問い掛けが多く、今日を説く場合も、五十年前の、例えば、神道指令以後の神社界はどうであったかということとは研究としてなされているわけですが、そうした歩みを踏まえて、今日神社神道がどのような位置にあるのか、あるいはどのような見方をされているのかということと議論を進めたいと思います。

上田先生、櫻井先生は神道の内部といっでは何ですが、神社界の立場からいろいろ発言されておられます。石井先生は宗教学、あるいは宗教社会学の立場から神社、あるいは神道の今日的な現代的な課題を、様々なデータを使って分析しておられる。西山先生は新宗教、戦前もそうでですけど、現代も含めて新宗教を中心にして、神道にもいるんな関わり合いをもたれております。そこで、神道やほかの宗教のこと、現代

の今日的な社会状況から見て神道というものを自分はどう見て、あるいはこう考えているというようなことを忌憚なく、学術座談会というよりも、むしろフリーに、問題点をお互いに披歴していただいて、少しでもこの雑誌の性格を反映するようなお話をしていただきたいと思います。

そこで一つの話題提供として、例えば、神前結婚式が数年前まで六〇何%あったのが、現在は四割ぐらゐまで下降して、キリスト教式の結婚式というものが約四割になって、恐らく今年か来年にはもう逆転するのではないだろうかと言われております。この間も「神社新報」で報道されていましたが、これはかなり客観的な報道で事実の報道です。例えば、神前結婚式というものは、ある意味では国民に定着していたもので、それがいつの間にか四割までなって、キリスト教式がどんどん増えてきている。これがいったい神道にとっての危機を意味するのか。それとも神前結婚式が生まれた由来が当時の社会的、経済的背景をもとにして、手軽に結婚式が挙げられる、その場としての神社、ここは東京大神宮さんですが、そういうものが約百年近く経過して現在ではキリスト教の簡便さといえますか、一つのファッションを含めてですが、単にそういうふうになっただけで、本質的に神道の衰退とかは意味していないのだと言えるのか。これは見方が大きく分かれると思うのです。

神道は祭祀だという立場からすれば、これは昭和五十二年に出された最高裁の判決と同じですが、地鎮祭なんていうものは神社神道にとってみれば大した祭りではないのだと、だからこれが勝とうが負けようがさほど大した問題ではないんだという意識もあつたわけです。しかし、実際には地鎮祭そのものが神道そのものを象徴するような形になって、神社本庁とか神社界でも軽視はできないということで真剣に取り組んだ。それと同じアナロジーを使えば、やはり神前結婚式は四割まで落ちてきた、キリスト教式は四割まで伸びてきたということは、単にファッションとか今の風俗、若い人たちの生活意識を反映しているだけではなくて、もっと真剣に神道そのもののあり方、神前結婚式というものを通して、もう一遍神社神道というものを見直さなければならぬのではないのか。このままほっとけば神前結婚式に象徴されるように、神社界の発展というのは望めないのではないかという考え方もあると思います。そこまで深刻に考える必要はないとする立場もあると思います。そこで、ずっと神前結婚式を追っておられる石井先生からご発言下さい。

石井 神前結婚式はしばらくまえから興味をもっていて、少しずつ文章を書いたりしていたんですが、数年前から傾向を見ていると、どこかで逆転するだろうとは思っておりまして。ただし、いま阪本先生がおっしゃった「神社新報」に載っ



たデータですが、あれは実はBICブライダルという結婚式の案内を事業にしている会社のデータなんです。どこまで信用が置けるかというのにまず疑問があります。それでも、全体としては減っていることは間違いないと思います。

実はあれこれいろいろ調査をしておりますが、気がつくのは、むしろ減ってきたということよりは、格差がはっきりしてきたといえますか、そういう印象のほうが強いです。昭和三十年代に神前結婚式がワッと普及したときに、ホテルや旅館主導でできたホテルの中の神前結婚式場があるわけです。そこへ近所のお宮から依頼があつていくようになる、どうもそういったものが減っているわけで、ちゃんとした本格的なもの、そちらはむしろ割合が高くなっているというデータもあるのです。だから熱心に神職の方が舞台を整えて、あるいは社頭を使ってきちんとやって、披露宴会場はホテルと契約しているみたいなの、そういったものは増えているのでありまして、何でもかんでも人が入った状況から、だんだんと粗悪なものは捨てられて、きちんとしたものは残るという傾向

へ変わったのかもしれませんが。格差の増大、あるいは本物指向といえますか、多様化の中で選択肢として粗悪なものは捨てられていくことの方が重要な点だと思うのです。

阪本先生がおっしゃったように、やはり、たかが神前結婚式、されど神前結婚式なんですね。重要であることは間違いないわけです。これがどのように広がっていったら、現状がどうで、将来どうかというきちんとしたデータがほしいのです。そうしたデータがないと判断が大難解になってしまう。減ってきて益々だめになるだろうとか。データをきちんと把握しないと、将来の神社のあり方の推測がラフになるという気がしているわけです。千葉県神社でしたか、挙式をご社頭でやるようにしたら、そのためかなりシステムティックにしたのですが、毎年増えた。あるいは、神奈川県のお宮はかなり意欲的な宮司さんが多いようですが、そうした宮司さんのやっているホテルでは神前結婚式が圧倒的にシェアが高いとか、同じ横浜の近辺のホテルでも、データによってかなりばらつきがある。意欲といえますか、人的ファクターの重要性といえますか、機械的で一方的なプロセスではなくて、むしろ格差の増大ということだと考えたほうが実態がわかりやすいのではないか思っています。

上田 それは確かにあるような感じがしますね。私も何度かホテルでやるのに出張してくる神職が、あんまり具体的な名

前を出すすと具合が悪いのですけれど、まだ本格的に神職にもなりきっていない者がやっていますからこっちははらする。そういうのをやっていると実際に結婚式に参列している人にとっては、そういうのはほかにどういう口コミでいくのかどうかわかりませんが、おっしゃったこととつながるような気はします。

櫻井 私なんかも石井先生のような数量的に抑えながらと



いうことはなくて、感覚的に知ったり、あるいはよく神社から発刊されている「社報」を見ていますと、いまおっしゃった格差ということに関しては、本殿で式を挙げるというのを強く打ち出されてまして、いままでであったら特別施設を構えて、あるいは儀式殿とかで、どちらかといえば数量をこなそうという方向があったけれど、もう少しじっくりと本殿で挙げてもらうようなことも必要ではないかということで展開しているところもあります。それから、確かにその意味では数が減ってきたとしても、そこに結婚式の意義を神社の方々がどういうふうな受け止めて、そしてそれを展開されようとされているのかということに、かかわってくることもあると

思うのです。

もう一つこういう課題に関して、結婚式にどういう人たちが参列しているかという問題というのも、現代的な点で大きな変化というものがあるのかもしれない。昔だったら親族というのが普通ですが、いまは友人とか、会社の人でも上司を多くというよりも気の合った仲間・友人というレベルのほうが多くなっているのではないですか。そういうものをどうとらえるかということがあると思うのです。

上田 井上順孝さんは神道の問題として、情報化社会の問題は別として、伝統的な儀礼にこだわすぎる、様式にこだわすぎると言っている。例えば、これは井上さんが直接言っていることではないのですが、私はそれに関連して思うのですが、新婦側の文金高島田、長振袖のあの様式でなければ神道でないのかということ。あるいは、男のほうはモーニングを着ている。女性のほうが、いま若い女性、要するに洋式の白の純白の、あれを神社でやってはいけないのですか。

石井 私は学士会館で挙式したのですが、私は普通のモーニングを着て、家内はウェディング・ドレスでやりました。

(笑) いったいにかまいませんと言われて。

上田 それがどれぐらい割合があるのか。

阪本 宮司さんのところなんかどうなんでしょうか。ここではそういう、やはり和服が……。

松山 私のところは営業上のこともありまして、まず九五％は白い打掛けを着てやっています。だから形をなるべく崩さないように、逆にそういうやり方によってうちの特性を打ち出しながらやっています。

上田 伝統を守ることによって、逆にそこが信頼されるという……。

松山 ただ、何でもかんでもお客さんの言われる通りなんということは絶対やらないです。

阪本 それがさっき石井先生が言われた格差ということですね、そうやってある意味ではきちんとするというような。今、神前結婚式のことを取り上げましたけど、これは七五三でも、いわゆる雑祭でも、例祭なんかでも同じなんです。あの意味では人ということになってしまいます。神社を支えるのも宮司なり神職なり、総代という人ですから、究極的には人物論といえますか、人材論になってしましますが、そこまでいってしまつと、これは何も話すことがなくなりますので。そういう具体的な個別的なものから何が抽象できるか、それで全体的、一般的に神社界、あるいは現代の宗教にとって神道の特異性といえますか、あるいは特徴というものを抽出しないといけない。

この間の神道教学研究大会なんかでもそういう傾向があります。だからそれをちょっと乗り越えて、一種の神社界、あ

るいは現代社会における一種の普遍性として神道として何が言えるのか、あるいは神前結婚式を通して何を神道は訴え掛けているのかということが出てこないといけない。確かに格差というのは各宮司、あるいは各神社の努力というのは大事な意味を持ちますし、それによって差が出てくるのはやむを得ないですけども、ただ、それを全体に底上げして水準を上げることが、はたしてできるのかできないのか。

石井　そういうことですね。だから基本的には現代社会における通過儀礼とか、年中行事の中で、現在、それから将来にわたって神社神道がどういう役割を、あるいは意味をもつことができるかという問題だろうと思うのです。それは伝統文化という形で底流として強く流れているものです。けれども、神前結婚式の数が減少し、チャペル・ウェディングが増えていることからわかるように、必ずしも人生の大きな節目に伝統的な文化を選択しない人がいるという事実もあるということです。だから伝統宗教だから、あるいは日本の伝統的な文化の中核に根差しているからというだけで、そのまま伝統文化が継続するかどうかはわからないということだろうと思うのです。

阪本　西山先生どうでしょうか。

西山　私はこういう展開に初めからなるとは思わなかったんですけど、私は門外漢なものですから、見える神道と見

えない神道と分離するのです。見える神道というのは、例えば、お宮の神道とか鳥居の神道とか、いまの儀礼の神道とかいうところは見える側面です。それに対して日本人の宗教的感性としての神道みたいなものは、見えない神道だということです。見えない神道にむしろ私はかなり興味をもっていたものですから、見える神道の側面はちょっとあまり深く考えてこなかったのです。いまの議論は見える神道の側面の話だったのですが、私は見える神道は場合によると発展したり衰退したりすることはあるかもしれないと考えています。しかし、見えない神道の側面は、日本人である限りかなり、多少変容はあっても、これは深く日本人の心の奥底に入っているだろうと思うのです。

いまは儀礼の話ですけど、キリスト教の結婚式に抜かれたんですか、並んだんですか。

阪本　いま並んだところです。

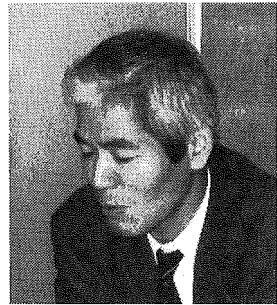
西山　仏教の結婚式はなぜ行わないかということを考えますと、日本人の宗教の使い分けの論理といいますか、分業の論理とかかわっているのかなという感じがするのです。例えば、早い話が暮れの一週間を見ても使い分け、分業があります。クリスマスをやって、除夜の鐘を聞いて、それでお宮参りをするというようなことがありますし。人の一生でもそうだと思うのです。初宮参りをやって、成人したら格好いいか

らキリスト教で結婚式をやって、葬式は仏教だと、大体相場が決まっていることがあります。日本人はうまくそういうものを使い分けしているのだろうと思うのです。あるいは、例えば、この世のお祝ごとは神道さんをお願いしようと、これは紅白の幕で表せる。そうでなくて黒白の幕で表せることというのは、あの世の問題で、これは仏教。この世の悩みごととか災いごとの解決というところ、これは新宗教。これはみんな分業、使い分けだと思っております。

ですから、キリスト教式の結婚式はちょっと格好いいからといってキリスト教式が伸びてきたとしても、仏教が伸びてくるとは思いませんので、あくまでキリスト教と神道式の競合だろうと思うし、そんなに憂えることはないのではないかと。先程、質が良ければ必ず大丈夫だという話もありましたから、そんなに憂えることはないのではないかと思っております。結婚式についてはそんなふうに感じています。

「見えない神道」の実情

阪本 見える部分の神道と見えない部分の神道という、ある意味では神前結婚式というの見える部分、儀式的部分から入ったわけですけども、当然議論の展開は、その見えない部分の神道というものがあります。見える部分としてさまざまな祭り、儀式、通過儀礼、年中行事というものがあ



それがある意味でいえば分業して各宗教が、あるいはセクトが担当している。これは確かにその通りで、江戸時代を見ても、神道と仏教、神社と寺院という大きなものがあって、個人の救い、家の宗教としてはお寺、共同体の一種のハレの場とか、そういう意識を高める場としての神社と祭り、そして、その中間にあるものとしてさまざまな陰陽道であるとか、一種の流行神であるというのが出て、江戸時代においても、あるいはそれ以前においてもそういう意味での使い分けはしてきたと思うのです。

江戸時代は三千万の人口、いまの一億二千万と量的には違いますが、一億二千万の中で一人一人がそういうふうな使い分けをしている。確かに西山先生のおっしゃることはよくわかるのですが、ただ、神道にとって一番、こういう言い方をすると挑発的な言い方になるのですが、少なくとも戦後の日本においては、ある意味では否応なし、好き嫌いを問わずに、神社神道というものが本来競合しなくてもいい部分を、ある意味では強制的に宗教として他の宗教と競合しなければならなくなりました。宗教法人法によって宗教法人という法人になら

ざるを得ないし、それをしないと存続できないという状況があった。神社が戦前も戦後もずっと存在してきているということは事実ですけども、昭和二十年（一九四五）を境にして、神主さんの意識も、社会を取り巻く状況、意識、あるいは見えない部分とおっしゃった神道も、やはり戦前と比べると圧倒的にいまはパワーが落ちていて、正直な話が。戦前は見えない部分のところを国家の公教育であるとか、あるいは社会の自治体、あるいは社会地域の一種の無言の教育でもって、一種の神道精神といったら何ですが、そういうものが土壌として、神社があった。

しかしそれを、よくないのだということで占領軍が檣玉にあげ、神道指令が発令され、日本国憲法の制定のもとに宗教法人法が施行されてからは、その見えない部分というものも実はかなり弱まっている。その弱まった部分で見える部分ばかりうじて神前結婚式、あるいは何かの祭りとして出ているのではないか。京都の三大祭にしても、実際には行列であるとか、そういう見える部分でみんなは沸いたのですけど、本来的な祭祀の意義、お祭りの意味は意識されているのか。

確かに祭祀というのは活発化、あるいは活性化している部分もあるけれども、実際にそれを支える意味での神社の本質となるとかなり弱い。見えない部分は弱くなった。何とかここで挺入れするなり、よっぽど真剣に考えて、何か神社神道

全体の一つの理念を具現化するような、新たな目標みたいなものをつくらないといけないのではないですか。櫻井先生はどうでしょうか。

櫻井 阪本先生の考え方では、見える神道の部分、例えば、先程の結婚式で統計で落ちてきているという部分は、同時に見えない神道の衰退ということに関わり合っているというふうに見えるわけです。

阪本 私は学生に毎年、何百人単位でアンケートをとっていまして、そうしますと高校までの教育ということは抜きにして、家庭教育では全く神道というものと無縁です。神社へ受験の合格祈願で行った、初詣では行っただけ、しかしそれは単なる行っただけというだけで。じゃあ結婚式なんか君達どういう形でやりたいかと思ったら、三百人ぐらいいた中で神前結婚式でやりたいのが二人か三人だった。じゃあみんなキリスト教式のが格好いいからいいのかと言うと、それも少ないのです。圧倒的多数が、別にそんなのは関係ないと。

上田 友達で会員制です。

阪本 ええ、したくもないというのは、つまり簡単にいえばよくわからないからで、これだけ一種の宗教ブームみたいになっているのに、いざ聞くと、あるいはアンケートをとると、必ずしも明確に意識はないというか、ある意味ではどうでもいいじゃないかと思っています。そのどうでもいい

じゃないかという若者の気持ちに、ある意味では宗教がどれだけ入り込んでいくかという努力です。

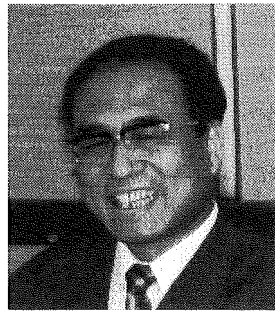
上田 それこそ今日のテーマで言っている現代という、既成宗教がこれは神道だけではない、仏教も、キリスト教もどいう状況にあるのか、キリスト教は適応していると言えるのかどうかかわらないけれども、現代とか、あるいは近代化以後の日本の大きな変化についていけないというか、いまの特に若い人たちの感性から見ると逆についていけないという、そういう不適応状態を起こしているんじゃないか。それこそ西山先生がやっておられる新宗教がなぜ起こってくるのか、そこがいったい現代の若者のどこに訴えているのか、それに対比して見ると、神道にある問題というのが出てきそうな気がするんですが。

西山 難しいですね。

上田 新宗教でも、いわゆる新宗教というものはもう既成化しているんだと、「新新宗教」とか、西山先生はいろんな造語を作っておられます。初期の新宗教というのはもう既成化して伸びる力を失っているなんていうことも言われます。

いま現在伸びている新宗教は、若者のどういうところをつかまえているのか、神道が何を持っていないからそういう若者に訴える力がないのか、そんなことについてどんなふうにお感じになるんですか。

西山 神道がなぜそうなのか、いや、実際そうなのである



かどうか私にはわからないのですが。実は今日持ってきた森岡清美先生の『日本における宗教社会学の発達』（『宗務時報一七』・一九六七）の中で、神社神道ということをも民間信仰のことと同じように使っているのです。「民間信仰的神社神道的な現象」といっているのです。こういうふうに一緒に並べていってしまった方がいいのかどうか。これは神道とは何か、それは民間信仰とどう分けられるのか、あるいは民俗信仰とどう分けられるのかという問題になると思うのです。これは見えない側面を含めて、それから民衆的な、あるいは集落に密着した民衆の生活レベルに即した形で見ると、一緒に並べてしまってもいい要素もあるかもしれない、ですからそういうことなのかなと思いますけど。

そういう見えないところもかなり含んだ神道というところからいえば、日本の新宗教はかなりそういう要素を反映しているような感じがするのです。そういう意味からいえば、神道は衰退しているとも思わないです、神道的な要素は。その場合は民間信仰的神社神道と両方になってしまっていますが、

そういうものは衰退しているとは思わない。

石井 それは神道的なものの考え方とか世界観というものが、新宗教運動の中に再生産されて生きてるということですね。

西山 ええ、いつも再生産されていると思いますよ。新宗教といった場合に、これは神道的であるとか仏教的であるとかいって分けるのは生産的でないと思うのです。特徴を見るときもう通底してしまっているものが多いわけで、仏教的といっているものでも、かなりの程度、それこそ民間信仰的仏教的信仰的というように混じってしまっているものが多いと思います。そういうものの共通のところはかなり昔から日本のものがあった。私は新新宗教は新を二つ付けていても、着せ替え人形であると言っているので、別段、新しいとは思っていません。ただ、古いものが新しい形をとってくるということはあると思います。そういう意味ではイノベーションが行われているのかなと思う。先生も深見東州さんとかいろいろ本を出されて。(笑)

上田 いやそれは、逆からいいますと……。

西山 ですから、大本のときも神道を独特のスタイルで変えたと思うのですが、深見東州の場合もそうだと思うのです。

上田 しかし逆からいいますと、伝統的な神社神道のありようというのが、現代に訴える力を失っているということ



になりませんか。現代の若者が新新宗教に魅力を感じるといふ、その中にちゃんと神道的なものがあり、仏教的なものもあるんだと。われわれから言わせるとミックスしちゃって、原理がいったいどこにいつてるんだというふうに疑うけれども、実はそういうものが訴える力を持っているということとは、伝統的な仏教なり、伝統的な神社神道なりが若者に訴える力を失っているということを意味するわけで、それはどこなんだろう、なぜなんだろう。

西山 これはやはりどうなんでしょう、いまの若い人に対してだけではありませんが、宗教はいつの時代でも、その時々の人々が感ずる感性に合わせた形で説き直しをしないと、やはり受入れにくくなってくるものではないでしょうか。

上田 ただ、伝統的な神道の立場からいいますと、どうしてもいまの時代、教育が間違っている、人間とは何かという理解が間違っている、刹那主義で利己主義で、ただ感性に訴えるものがあればすぐ飛び付く、そういうことであってはならないんだという。だからわれわれは教育を改め、あるいは本質は何かということを訴える努力をすることが一番大切な

ことなんだという、正当な理論からいうとどうしてもそういう言い方になるんです。

西山 ある意味では、だからお説教に近くなる。

上田 そのことが若い世代に拒否されているという、その事實はいったいどうすれば解決できるか。

西山 でも、新新宗教なんか見ると、小さな神々のおぼさんの教祖などというのは、徹底的にお説教しているんです。それで泣いているんです、その指導されている人が。それでもみんな喜んで、自虐的かもしれませんが、ついていっているのです。

上田 それが私はおかしい、この頃お坊さんでさえそういう力を失いつつある。かつて坊さんは説教者であった。いまはごく僅かの人が喫茶店で説法したり、いろんな工夫をしておられますが、しかしそれは非常に限られた数で、新宗教のようなある時期バツと若い人たちの心を握るという力はもうなくなっている。神職はもともと神職であって、お祭りをしているばいばいんだと、教化者であるという姿勢をもう明治以来失ってしまっているという。いまもそれが強くて、われわれはちゃんとしたお祭りをしていればいいんだという、そこが神道が仏教よりもある意味で深刻な問題を持っているのだと思うのですけど。

西山 国民教化運動の頃でも、僧侶の力がどんどん増して

きて、結局、神職はむしろ教化の側面は弱いということを露呈していますね。新新宗教に限らず新宗教の場合は、お説教をしても説き方が違うのではないかと思っています。帰納と演繹という言い方がありますが、生活の場から帰納していつてどこかで本質的なものにつなげてあげているのです。上から垂れてくるのと違うと思うのです。そこがやっぱり、新宗教と既成宗教の違いです。これは新宗教一般に共通の特徴だと思っています。帰納的に、だから問題解決的に教えが説かれて、両者が結ばれる。全く個別の他愛ない人々の悩みと、ある意味では普遍性のより高い教えというものをちゃんと結んでる。立正佼成会は「結び」という面白い言葉をもっています。

「結んでください」といいます。法座でも何かにつけ「結んでください」といいます。「結ぶ」というのは、それこそ両者を結ぶという意味です。ですから、教祖が生活の中で苦労し抜いてきて、ちょっと見ただけで、顔色を見ただけで、今日はこの方はどんなことで、どのくらいの程度悩んでこられたかということがわかってしまうというか、人の悩みが見られるというか、その力の差が新宗教と既成宗教の間にあるのではないでしようか。そうなると教派神道といえますか、宗教神道のほうが神社神道よりもよほどそれは強いといえるでしょう。現在の神社神道はどうなのかわかりませんが。

上田 神社神道の正統派はちゃんとものをいってくれなきや

困る。(笑)

西山 私は民間信仰と神社神道は、両方とも広い意味で見えない神道と解釈することが可能だと思います。私はアニミスティックな感性なども、広い意味では神道的なのかなと思います。見えない神道というならばそういう要素があるのかと思うのです。

私は、いまは教会に行っていないませんが、青年期にキリスト教の影響を受けている者なのですが、家を壊すときに、長年住んだ家でしたのでちょっと涙が出そうになりました。それで畳を上げてしまつてある床に酒を撒きました。床に一升飲んでもらつたわけです。それから、柿の木を切るときに、痛ましくてしょうがなくて、やっぱりお清めをやりました。そういう感覚というのは、僕みたいな者にもあるのですね。いまの若い人にはあるのかどうかわかりません。残っていると私は信じているのですが、長年抱いてきた人形を野菜屑のゴミと一緒に平気で捨ててしまうお嬢さんがいるというのですから、アニミスティックな感性も変わってきているのかも知れません。でも個人の体験では、家の床に酒を飲んでいただいたのです。すべてのものに命ありといいますが、そういう感覚が私にもあるわけです。そういう感覚が、もしかすると公害問題とか何かを考える場合でも、とっても大切になるのかも知れません。岩田慶治さんのいう、ネオ・アニミズムで

はないけれど、何かそんなことを感ずるのです。

それから、『法華経』に説かれている「久遠仏の思想」、日蓮宗のほうでは「久遠実成釈迦牟尼如来」というのですが、これは久遠において実証実修された仏、実際に修行をして仏になられた仏さんであるという考え方があるのです。ですから個人格をもった仏さんなのです。ところが創価学会はどういう説き方するのかというと、結局「宇宙大生命」といつてしまうのです。これは要するに法身仏なんです、仏教的にいえば。しかし、これは天地大自然と表現するのとあまり変わらないのです。ほかの仏教系の新宗教も同じことです。立正佼成会の庭野日敬開祖も同じことをいいます。結局、宇宙大自然が仏さんなのだとっているのです。

それは『法華経』のオーソドックスな教学からいうと違うじゃないかといつても、みんなそうなつてしまふ。仏教が民衆の基盤に受け入れられるとみんな変わつてしまふ。これはもしかすると日本の変容というか、神道的変容というふうに言えるのかも知れません。感覚的に、仏さんの理解の仕方が変わつてしまふ、これ面白いなど。先程の家を壊すときにお酒を飲ませたのとはまた別の観点ですが、新宗教の研究をしていると、そういう面白いことに気がつくわけです。結局、日本人の仏さんは宇宙大自然なのです。

都市生活の中の神社

石井　そういう言い方をすると、しばしば神道関係の本などでもそうですけれど、安心するところがあるわけです。いろいろなものの中に散見されて、神道的な世界観なり、儀礼の変容をも含めて残っていると、神道はいまでも大丈夫という言い方があるわけですが。実際の個人や社会にとっての重要度という点からいうと、私は阪本先生の言い方のほうがより実態に近いと考えています。もはや若い人も含めてわれわれの具体的な生活や社会に対する神道の影響力は、相対的に下がっているのしかいいようがない。それはもう神道が主権する具体的な儀礼を見れば、かなりわかるだろうと思うのです。

阪本先生のおっしゃるようには何かしないかというのがある、それは大変よくわかるのですが、例えば、戦後の神社神道のあり方を見ていると二つの大きな極の間を揺れているように見えるわけです。一つは伝統的な共同体の祭祀としての宗教。これは戦後になってからも、社会統合は無理だけれども文化統合という形で、これは森岡先生なども随分強く言われていましたけれども、文化統合という形で神道はまだ機能しているんだ。特にこの時期ロバート・ペラーのいわゆる「市民宗教論」が神道界で大変好意的に迎えられたというこ

とがあって、いまだに国家、あるいは地域社会の中の神道、神社のあり方が模索されている。一方でもう一つ、岸本英夫さんなんかは典型的ですけれど、個人を救済する宗教になるんだ、それが近代的な神道のあり方だというのがあって、そういう面というと教義、教学、神学をきちっとさせた、個人の具体的な悩みを解決していかなければいけないという見解、これがもう一方の極にある。それが日本の社会の変化する中で、絶えずあるときはこっちに振れてみたり、あるときはこっちに強く出てきたり、結局二つの大きな極の中で明確なスタンスをとることができなかったのではないかと。時代の変化のほうが神社界のとの対応よりも早かった。地域社会の崩壊もかなり早かった、家が壊れていくのもかなり早い、場合によると夫婦別姓までが実現するかもしれない。地域の祭祀を考え、家庭の祭祀を考えるとという段階で、先へ先へ変化のほうで早くて、なかなか適応が間に合わないという状況にあるのではないかと私は理解しているのですが。

上田　共同体の信仰であるという神社神道の原点を変えるわけにはいかないと思うのです。問題はそれを支えてる、その共同体構成員個々人にその自覚を持たせるための営みを神道者はしているかという、やってない。それを私は訴えているつもりで、そんなことないという意見があるなら聞かせてもらいたい。

阪本 何も言ってないです。(笑)

櫻井 私は大都会に住んでないものだから、よくわからな
いのですけど、顔合わせる範囲というものはあるだろうと、
生活としては。そういう中でのあり方というものが本当に無
視されているということになると、これは神社神道のいまま
での一つの支えとしてあるものが本当に廃れていくだろうと
思います。もう一つはそういう面での再生産というとき共同
体の、そのときに逆にいえば神社神道というものがどうい
う役割を果たそうとしているのか、あるいは果たしつつあるの
かということが、神道というものを考えていくうえで大事な
ように思うのです。

そうしたとき私なんか、いままでどちらかといえば地域の
文化・社会的統合としての神社ということを書いてきた。し
かしその中に、例えば、今日的に言えば自然との一体的な生
命の問題とかいうような論というものが援用されて、そして
新たな共同体づくりというものに神社界というものが、ある
いは神社の意義というものが説かれようとしている、そうい
う動きもあるのではないかと見ています。

上田 住んでおられるところの多少の違いがあるのだと思
うけれど、例えば、私のようなところは東京圏で公团的なア
パート、そういう世界では隣りと付き合うということはほと
んどないんです。同じ棟にいる人、年中家にいる家内は付き

合いがありますけど、男同士で顔を合わせるといのは、そ
の子供が付き合っていて、その相手の家に不幸があつてこち
らが行ったという、それで顔見知りになって、会ったときに
ひよこつと頭は下げるけれど、あるいは「おはよう」とか
「こんにちは」は言うけれど、それ以上の付き合いは全くな
いです。

だから共同体というのは、地域社会において伝統的な共同
体、つまり持ち家を持っていて、阪本さんの例なんかは新し
い共同体をつくるべき環境にあつて、何か自治会の役員して
いるらしいけれども、そういうところできると、純粹
に都会的な勤め人の集団があつて、子供は学校の友達で知っ
ているけれども、母親は多少の関係はあつても、一番肝心な
男は全く関係がない。そういう状況の中では社会統合するとい
いてもなかなかできない。だから婦人層を掴めといつてる。
神道は形にこだわらずる、実質を無視してる、自由にも
の言える婦人の氏子、敬神婦人会があるのかと言いたい。そ
ういう意味での自覚的な集団というものをつくる必要がある
と思う。そういう営みをやつてない、そこが一番問題で、だ
から個人を無視した集団のことを考えるけれども、集団が本
当に動くためには、個人が自覚した個人でなければだめだと
思うのです。形式以外のことはやらないです。なぜ新宗教が
若手の集団で動くのかという、神社神道で本当に若手の集団

が中心になって動いているかといいたい。

櫻井 現実にはおっしゃったように、先生も本当に同じ団地の人にさえ全然会わないというわけですね。おばさんが子供を通じてせいぜいちょっと会ってるけど、子供が大きくなったらみんなバラバラになってると。出会う場所というのは世代によってかなり違いますね。

上田 だから家内と奥さん連中との話し合い。ところが子供は、私は孫を育てて同世代の子が大きくなったなら、もう会っても顔がわからなくなっているでしょう、向こうは知っているけどサッと避けるでしょう。(笑) だから社会集団なんて成立しないんです。そこへ神職が何か働きかけてるかという点と絶望的です。私が住み着いたころは来てた、それからもう二十年以上全然音沙汰なしです。新宗教の人は来ますよ、訪ねて子供連れて来たりするけど、神社関係は一切来ない、何も働きかけがない。それでお祭りは神なしの神輿を担いで自治会がやっている。

櫻井 都会の現実をいわれるともう何とも淋しいですけど。(笑) しかし、結論ではないのですけど、そうしたもともとは世代間で、ある意味で非常にバラバラでありながら、例えば、祭りというようなものがそういう全体的な世代間の交流の機会でもあったのではないかと。しかしその祭りそのものが、分化して拡散した状況になっている。そこに例えば、神

職の方々にとっても、この儀式的部分だけはおれたちの領域だと、あとは知らんというような、こういう形で益々廃れていくんでしょうか。

上田 団地に一時神社が新しくつくられた例なんか、「神社新報」でも取り上げていたけれども、その後のフォローをしてないでしょう。その神社を中心にして本当に新しい祭りが起こってるかどうかという。私は両方がわからないです。

櫻井 でも、私がこの間学会でお話した干拓地の場合なんかは、もともと神社があって、そこから祭りだとかいろいろ発展したのではなくて、何かしようじゃないかという意識を、しかもそれは全部じゃないです、ほんの一部の人達だけだと思って、みんなにずっと話をかけていた。そうした中でお祭りというのをやって、それじゃ神社がいるんじゃないかというようなプロセスをとってるところもあるわけです。そのお祭りの発端というのが、単に子供の「うちは何で祭りがいないの」という疑問で、神社までつくっていくというところへきていると。そうしますと確かにおっしゃるように、何かそういう創造性ということに関しては、当時の青年層の人の力というのは大きいと思いますけど、それをうまく説得的に統合していくような何ものか、しかしその統合していくものは、単に理屈だけではなくて、何らかのいままである象徴というものが選択され、それが逆に人々が結ばれていくうえで

の力となって、発展を見せるというようなことがあり得るように思うのです。

西山 先程、神なしの神輿というお話がありました、本当に神なしとっていいかどうか。それは〇〇神社のお祓いを受けていない神輿かもしれないし、御神名も何も関係なくやっているのかもしれませんが、しかし名無しの神様がそこで働かれているかもしれないし。

上田 神道の立場からいえば、神を迎える儀礼なしに、神に対する儀礼なしに、神様がおられるかもしれないなんていうことはいえないです。

西山 それはそうかもしれませんが、でも結果的に結び付く例だってあるんじゃないかというお話がありましたね。そういうプロセスもあるかもしれないよ。ですから、それは初めから全然関係ないんだというふうにしてしまったら、もうこれはどうしようもなくなってしまう。

上田 そういう団地では、団地自治会というのが基本にあり、選挙単位になって、うちでも創価学会と共産党ですよ、支配しているのは。

西山 それは本当にそうです。

上田 だから阪本さんみたいに自治会の役員になって面談するということをやって、それで声を掛けて働き掛けると違ってくると思うのです。それは私の真向かいが共産党で、その

息子は國學院の経済を出ただけでも、家内は共産党から年中挨拶されるわけです。それで創価学会は新聞から何から私のそこへ入れてくるでしょう。そういう関係で人間関係はあるんだけど、イデオロギーとかそういうことになったら全く違う人になってしまう。それが団地生活の現実です。

西山 ただ先生、先程石井さんがおっしゃったことは大変大事なことだと思うのです、神道がどっちへこれからいくのか。例えば、選択の問題としては、戦後余儀なくされたんだから、もう宗教として、個人信仰に基づいたものの一つとしていくしかないんだというふうを考えるのか、それともさっき言ったように、共同体の文化的統合の象徴としての神社という形でいくのか。後者を選択した場合には、真向かいに創価学会がいようが共産党がいようが、そういうものにとらわれてそれと対抗してしまったり、それと並べられた一つにしてしまったりしたらこれはまずいでしょう。要するにイデオロギーの一つとか個人信仰の一つになってしまふ。後者は、そういう立場をとらないで、そういう人もひっくるめて、あなたは嫌だということかもしれないけど、われわれとしてはそういう立場をとらないと言わないといけない。神社というものはコミュニティー全体のもので、あなたも文句言ってるけど氏子なんだというふうにもっていかなくてもいいか、結局そういう問題であると思うのです。部分観に立たないとい

うのが、神道の一つの特徴でしょうから。

上田 いやだから、その意味でいえばそういう団地であっても、夏には盆踊り、櫓を組んで、神輿を担いでやるわけです。ところがその神輿はさっき言ったような話だと。だから形の上で日本人の伝統は残ってるかもしれないけれども、内実が違うものになってしまっている。

西山 そこが難しい。社会学者はそれでもかなり意味があると思うのですが、神道学者はそれはだめだと見るかもしれない、そこは多分意見が分かれるでしょう。

個人の信仰、共同体の祭祀

阪本 ここでせっかく今井達さんに来てもらったんだから。上田先生が言われたように、神様のいない樽神輿でも何でも、それが現実になくさんあることはありますよ。それと同時に櫻井先生が言われたように、そこに仏つくて魂を入れるという形もあるわけです。働き掛け、要するに神職のアピールというようなことなのでしょうが、そのアピールというのは簡単に言えば、神社とは何かと説明することですが。

今井 もっと単純に言うと、その団地に住んでいる人が氏神様を知らないわけです、祭りの存在を知らない。神社のほうとしてはその地域に住んでいる人全員が氏子だと信じている。これは明治からといっていいのか、江戸からといっていい

いのかわからないけれども、歴史のうえでそうやってきている。ところが住民というものは祭りに参加するものだけが氏子であって、参加しない者は氏子でないという意識がある。積極的に氏子でないという人たちがいますね、創価学会とか共産党。ところが宙ぶらりんの氏子認識がない人々に対し、それに対してアピールを出しているのか出していないのかというのは、神職の一つの要件だと思うのです。アピールを出せば、住んでいる人は氏子さんですよと、嫌な人は氏子でないかもしれないけれど、でもこっちは氏子だと信じていますから、どうぞご自由にお入りくださいというのを投げかけているかいなか、それが今後の問題だと思うのです。二十年前に先生の団地で、あなたら氏子ですよと呼び掛けがあった、いまでもそれが続いていれば、例えば、初詣では氏神様からという、パンフレットなんか、でっかい旗立てて。

上田 私も船橋大神宮にいつも正月はずうっと行ってるんですけどね。

今井 それを知ってる人だから行くんであって、隣に昨日引越してきた人はどこへ行ったらいいか知らない。例えば、町内の掲示板に貼らしてもらおう。「初詣では氏神様」というのをベタッと貼る。あなたは氏子ですよというのを与えれば、また帰ってくるんじゃないか。

石井 私はそうは思わない。個人が特に現代社会における

個人や家が、お宮へ行くか行かないかの一つのポイントが、知っているか知らないかという認識の問題では恐らくない。

お宮から、あなたはうちの氏子ですよと言われたって、その人の実生活においてお宮の占める意味、役割がはっきりしないと、やっぱり行かないですよ。単に知ってる、ああそうですかと言われるだけで、うちは関係ないと言うのでは。

今井 関係ないというけど、初詣でにどうするかという場合どうですか。

石井 それはどこへ行ったらいいわけですね。

今井 どこへ行ったらいいんですけども、明治神宮に行くか、近くの知ってる神社に行くか。でもそのポスターがあるということで氏神という存在を知ってもらえるだけでも、これは何もしないよりいいだろうということはあてでしょう。

石井 それは全くその通り。

今井 その程度のレベルなんです。

西山 初詣では案外社名、大社に行くのが多いようです。しかし、七五三の場合は意外と近所の神社に行くのではないですか。普段神様は関係ないと思ってる人でも、子供に飴の袋を持たせたりして。ああいうスタイルだってかなり新しいものだと思うのですが。

上田 旧東京という狭い意味での東京では、明治神宮に行く人が多いかもしれませんけど。

今井 うちの七五三は三分の一ぐらいは氏子区域外から来るんです。その氏子区域外という人が、実は総代さんの孫なんです。総代さんの息子さんが、地方に出られて、船橋の団地に行かれて、船橋の団地で知らないから、じゃあ帰って来てやろうかと。

上田 そういつながりがあればいいんですけど。

今井 実は氏神様ってそんなものかもしれない。だから個人信仰的な氏神様になって、共同体としての氏神様ではなくなっているわけです。

上田 そういう場合に、神社のほうからそういう移住していった人に連絡をつけてるかどうか。

石井 それはしてないと思います。今井さんは現場とそれこそ両方見ておられるけど、やっぱりデータがないんです。データがないときちんとしたことはいいえないです。

今井 この神社へ行っても聞くのは、初詣ではこのところ行列ができると、小さい神社なのに行列ができると、不思議な現象だと。

石井 一時期より大社に集中はないんでしょうね。行く人が増えたのか。

今井 その原因がわからない。

西山 現状への危機感を感じているとかならない線いってるところがあるのではないですか（笑）。危機感を感じ

じられるというのは、新宗教とか新新宗教の動向を意識して、あれと比べて神社はどうなんだというような感じになりますから。

阪本 井上順孝さんがある意味でいえば神道に激を飛ばして、お前たちはやっぱり衰退するしかないんだと、もっと新宗教を見習って行かなければならないということを、書いてり言ったりいまでもしているわけです。

先程から気になっているのは、私はどうしても歴史やってみますから歴史的に見てしまうのですが、石井先生が、要するに両極に大きく振れてると、個の信仰と、それから国家的、公共、共同体でもいいですが、その間を揺れてるとおっしゃったんですが、私は実際そうだと思うのですが、正直いって神社神道というものは本来的にそのようなものであったと思うのです。これが神社イコール共同体の宗教で個の宗教ではないということをはだれが言い出したのかを、あるいはだれがそれを強めたのかは別として、例えば、伊勢神宮一つとっても、共同体、国家的な側面もあったが、しかしそれだけの面では伊勢神宮というのは、ちょうど今年御鎮座二千年ということになります、決して存続し得なかった。つまり簡単にいえば一種の個の救済であるとか、あるいは現世利益でも、これは御師の活躍だけではなくてずうっとあって、その両面がいまでもあると思います。

江戸期の神社の日記、私の熊本の家の親類筋の日記なんか何百年か見てますと、要するに秋祭りなんかの共同体的な祭礼と同時に、やはり実際には日々の祈願、あるいはお百度参り、そういうものに神主がある意味ではきちっと手当てをして、なおかつ、実際の欲求を満たす、病気を治す、お祓いをする、方が悪いとか、日待ち、月待ちみたいなところは、かなりの部分神社というものが面倒みてきている。その象徴が私は伊勢神宮だと思っているのです。

ところが個人信仰の部分が本当に消えてしまったというのは、西山先生がおっしゃったように、明治の国民の教化運動で簡単には政策的に、ある意味では口封じされて、実際にお上の命令で葬儀どころではなく、宗教的な活動をそれすらできない。一番それを端的に物語っているのは、昭和の初めに真宗十派が、神社が宗教的活動してて、おれたちのどこまで食い込んできておかしいじゃないか、それを政府に強くせまり、もっともっと統制を強めると、神社に宗教活動をさせるなど。それに対して東京府の神職会は、断固として真宗十派の声明を、そんなこといってたら神社の本質がなくなるということで、徹底的に神職たちは抗議しているわけです。ところがお上が聞く耳持たない。

私はそういう意味では、本来共同体的「公」のものであると同時に、一人一人の氏子の面倒をみてきたと言えろと思

ます。ところがそれをパーツと断ち切られて昭和二十年まできてしまった。明治の半ばになって強制的に権力によって遮断された。その遮断された部分に、官社的な意識、つまりお祭りだけやっていればいいんだと、尊皇敬神、皇室の尊嚴護持、国家的教育でもある意味ではスローガンみたいなのでいいんだという神主さんもかなりおられた。

戦後社会における神社神道の役割

阪本 葦津先生の生き方なんかは私は象徴的だと思うのですが、先生も神国のため、熱烈たる神社に対する信仰心はありながらも、しかし実際の神社界全体の力は、戦前の国家がやっていたようなことを、紀元節復活運動にしたりして、元号の問題にしたりして、即位礼とか大嘗祭の問題にしたりして、神社界が率先して国民運動をやらないと、ほかの友好団体はありますけど、主体的な力にはなり得なかった。その部分で私は全国の神社界の神職さんたちも含めて、かなりの部分のハンディを背負いながら五十年間やってきたと思うのです。本来戦前までは国、あるいは地域がやってたものを、神社界がやらなければならない、背負わなければならないかった。両方一緒には、先程もお話のあった両極端をやるうといってもなかなか戦後五十年無理なところがあった。しかし五十年たった今、本質に立ち返って考えてみる必要があるのではないか

と思います。

上田 井上氏なんかは、神社本庁が中心になって動いてきた、それだけを神社神道として印象的に理解していて、だからいまだに明治の国家神道時代の憧れが払拭できなくて、だから現代に全く訴える力がないのだという、そういう言い方をする。だけど神社神道の一番難しいのは天皇祭祀と各神社の地域共同体祭祀との関係の問題で、神職の中ですらそれを断ち切れというのがあるぐらい、現代に合わそうとする人たちがいるけれど、私の神道理解というのはそれは切れない。

そういう運動ができるのは神社本庁しかない。だからその運動を続けながら、しかも一方で各神社の神職が本当に教化者としての働きをしてもらわなければ困る。ところがそういうのはご祈祷神社とか何とかいう言葉があるでしょう、あそこはご祈祷神社なんだと。

西山 軽蔑の意味をこめてでしょう。

上田 その矛盾、神社界にある矛盾、それがよその人にはわからないというか、まだ神職でも分裂があると。

阪本 今井さんなんかどうなんですか。例えば、白髭神社でお父さんが宮司やって、あなたは欄干やっておられて、いま一方のほうでは「尊皇敬神」とか、そういうスローガンがある。

今井 正しいかどうかかわからないですけど、結局うちの神

社というのは地域統合の神社です、鎮守様だから。小さな三角形を持ってゐるわけです。その下にうちに兼務社もあります、その兼務社というのは旧寺島村のある神田地域を持つてゐるから、その小さな三角形を持つてゐるわけです。だから複層的にできてゐると。それに対して、例えば、東京の総氏神というか、もしかして武蔵国の総氏神というか氷川神社というのがあれば、うちあたりは下総になりますけど、東京の蔵前では武蔵国というので、頂点には氷川神社というのがある。その頂点の三角形がどんどん増えていけば、最終的に日本国のお祭りという天皇に結び付くはずです。そういう三角形があるのと、やはりうちは商売繁盛という神様だから、地域外からの信仰もある。例えば、吉原からの信仰なども戦前というか江戸時代にはあった。それに対して個人信仰の神社として裏付けられるから、二面性をもちろん持っている。

西山 二面性かな。

今井 二面性というか複層的な信仰です。

西山 複層的というか重層的に考えれば、個人の悩みごとの問題でいえばまずは現世利益です。祈禱信仰でもいいのですが、それがまずあって、それと天下国家の問題の間に地域がある、三層ぐらいになっているという感じがするのです。

今井 複層と思うのですけど、それに今度は、例えば、職域連合体の祭祀、信仰というのがもちろん入って、例えば、

何とか稲荷さんというのは……。

西山 酒屋組合なら酒の神様で酒屋組合なんかできたりいろいろある。

上田 二重に難しい問題をもっていて、社会の傾向全体が日本のジャーナリズムとか、日本の知識人とかが、少なくとも戦前の明治神道というものの国家神道というものを否定するという、それはいまでも状況は変わってないです。だから若い人たちの意識はそっちのほうが強くて、だから理屈で、言葉で言うときには、神道はそういうものでだから嫌だということところが個人的に本当に神社信仰の意味が理解できれば、当然それとつながってくるはずなんですけど、その方面への個別神社の神職の教化活動が本当にあるのかという、やっтерのかという。

今井 そのブロックを積み上げるような作業をしないで、ダイレクトにこのことを結び付けようとするから失敗するんです。

上田 だけどそれは国家レベルの問題でいえば、御遷宮の問題でも、それは澁川謙一さんがいわれるように、こういう形の国民奉賛でいいのかという。それなしにできないと思いますけどいまは。だけど原理的にいえば天皇家の祭祀であって、天皇が国家国民総合の象徴であるのなら、国費でやられるのは当然じゃないか。国民が多少の奉賛をすることは許さ

れるとしても、天皇が天皇の祭祀としてやられる面の影が薄くなっている状態ではないのか。それはいちいち勅許を得てやっているのだからその精神は生きているのだという言い方は出来るかもしれないが、この矛盾は当分の間は解決できないと思うのです、日本の現状があるかぎり。だから私は個別の一人一人の教化以外にないと思う。いままでの共同体、共同体を前面に出していくやり方は、いまの個人個人の心を掴むことは難しい。社会的に非常に阻害条件が多い。

井上氏なんかが言っているのは、そっちの全体としての問題からなぜ抜け切れないのかという、彼なんかは個人的にちゃんと聞いてみないとわからないけど、伝統的に国家共同体としての神道には反対だと思う、個人的には。だから本当に神道が力をもつためには、個別の人間対人間の、一個人としての信仰者をつくる働きをどうしてしないのか、全くやってないじゃないかという。なぜ新宗教が盛んなのか、新宗教からお前ら学ぶべきものがあるんだという、それをどうして学ぼうとしないのか、そういうことを考えていると思うのですけど、これ直接聞いてみないとわからないけど。

西山 新宗教から学ばなければならぬ要素はあるでしょう、あると思います。理念神道と生活神道というような言い方をすれば、こういう時代の中で理念神道の側面ばかりをあまり強調していったならば反発を招く。バランスの問題もあり

るし、どういう形で出すかということもあるし。したがって、基本は生活神道の側面に置くべきでしょう。生活神道の中にはコミュニティの神社という側面も個々人の現世利益に應えるという神道の側面も含まれると思う。この辺を中心にしながらやっていって、理念神道とつなげていくことをなさらないと。

上田 ただ、神道の伝統からいいますと、本来はそこに何の矛盾もなく神道が生きてきたときがある、その意識が抜けないのです。だから個人の生活に迫ることは、同時に国家のことを考えることだという、つい国家の説教が出てくるわけです。それを本当に捨てて、個人の生活の幸せに徹底して、神道が立っていくことができるのかと、現実には神社本庁がやっていることは、あるいは神道青年会がやっていることは、神道政治連盟がやっていることは、そういういまの一般が嫌っていることばかりじゃないかという、そういう疑問が出てくるわけです。

西山 しかし、コミュニティの宗教を強調すると、両方にまたがる側面が出てきます。個人のご利益にも応える側面も入ってくるでしょうし、もっと大きな公の問題も考える要素も入ってくる。コミュニティの宗教という側面をかなり重要視する必要があると思います。生活的要素も入るし、理念的な要素も入ってくる。

阪本 だからそれでいつも、矛盾まではいかないですけど、そのギャップといいますか、今井さんがいう複層性、あるいは重層性、あるいはブロックで三角形。そういう比喻というか、たとえばいろんな人が絡んでいて、天下・国家・皇室、その間に中間的な共同体、それから個々の家とか、それは昔からいわれているわけです。実際それはある意味でいえば、お寺なんかも、日本の仏教なんかもそれに近いことをやっているでしょう、真言、天台というのは上に天皇がいて、一種の精神的共同体、それから個々の個人の祈祷とかいう形で。ある意味ではそれが非常に日本的に、先生がさっきおっしゃったように、機能していた時代があったという、かなり長い時代それはあったわけです。例えば、江戸時代まで見たって、どんな小さなそれこそ鎮守様で天下国家とは関係ないようなところでも、「四海平穩、天下安穩」というのが必ず出てきている、あの灯籠にでも何でも、そういう意味では国家意識というのはいまよりはるかにあった。

それが現実には、ある意味ではそれが伝統であるし、實際理念としても現実的にあったし、一番それが相応しいということとはよくわかるのですが、ただ、戦後はある神社でご祈禱したり、そういう家族でお祭りをしたりとか、そのときにいきなり「天皇陛下は」「皇室は」あるいは「大嘗祭は」何でもいいんですけど、何なんだろうこれはいったいと。つまり

簡単にいえば、戦前国家が教育の面で、さっきの繰り返しになりますが、やっていた部分を個々の神主がうまく、それこそ先程「結び」とおっしゃったけど、結んだりつなげたり、あるいは中を埋めたりしなければならぬのです。私なんかでもこの間も中三の娘が、「お父さん、天皇って何もしないで何で偉いの」(笑)「何か二百何十億一人で使ってるの」と言うから、「何言ってるんだ」といったら、「いや、学校の先生がね」……。

上田 学校でそう教えるんだよ。

阪本 「学校の先生が天皇のところまで」と。「じゃあお前、日本国憲法的一条から八条までは習ったのか」と聞いたたら、「いや、そんなものは知らない」と。「ちゃんとそれに規定されてて、こうやって国事公用でお仕事としてこうやっておられるんだ」と言うと、「いや、そんなの知らなかった」と。

先生はそういうこと言わないで、天皇というのがいてどうだこうだと、まさにそんなのばかりでしょう。二十代、三十代、四十代の人々はほとんどそうなわけです。それに向かって神社本庁あるいは神社庁が、ただ通達一片、あるいは一種の理念みたいなスローガンだけでやってても、まあ言われたからポスター貼っておけ、では現状は済まされない。

西山 つなぎの思想というか、結びの思想がないのではありませんか。神道独自の結びの思想というか、つなぎの思想が

ないとすれば、怠慢じゃないでしょうか。

阪本 例えば、極端に言えば、國學院大學の神道の講義にしても、片一方の先生は天皇、天皇、天皇と、片一方はお稲荷さん、お稲荷さんでいくとかいう。(笑) 要するにもう学生からすれば全然脈絡がない、つながらないようにしか感じられないし、いままでの教育もそういう教育しか受けなかった。それじゃ家庭教育で神主のお父さん、お母さんからそういう教育を受けてるかという、それもある意味では腫れ物に触るような形で實際してないわけです。そこところがものすごく混乱するんです。

上田 半ば冗談で言えば、私は日本人の海外旅行を団体でいくことを禁ずる法律を作って、一人で行けという。一遍外国へ一人でおっぱり出せばいいと。

阪本 国というのがどんなに大事かという、それはあるかもしれませんが。

西山 天理教では「なるほどの人になれ」というのですが、立正佼成会では、「後ろ姿で人を導け」といいます。神社も「なるほどの論理」を持つ必要があるのではないのでしょうか。うん、そうだな、考えてみればなるほどね、と多くの人々が納得する「なるほどの論理」をうまく組み立てないと。

櫻井 いまのところで私なんか、この間の阪神大震災があったときに、現代の宗教はどんな役割を果たしたかということ

をよく聞かれまして、既成の仏教もキリスト教も、そして神道も何も果たしてないじゃないかという。そこでいわれる神道というようなイメージの中には、先程から阪本先生がずっとおっしゃってきただけの側面、阪本先生の言葉で言えば国が果たしてきた部分といういろんな問題というものを、神社界がいろいろ主張し、そして運動を展開された、そういうことをやるのが神道だというふうな面だとらえているところがあります。だから中には、いや民俗神道と神社神道というのはそこで大きく分かれるんだというような言い方をされる場合がありますけど、どうもそのあたりがその一面だけのものとして神道というものを、限定化してとらえようとしている。あるいは、神道界における者にとっても、そこがそれだけなのか、個人救済から幅広く、揺れ動くというよりはそういうものを含みつつきている姿というものの、そしてその中で何が結んでいるかということ、これはなかなか難しいものだと思うのです。

特に共同体の宗教研究をやっているときに、確かに地域地域の信仰というものがある。例えば、お伊勢さんはよく日本の氏神様だといわれますが、その総氏神という日本の大きな社会と地域という小さな社会とを結び付ける論です。それを三角形の積み重ねというふうにとらえるのか、何か小さな輪が大きくなったということなのか。小さな輪そのもののなか

に、そうしたいわば広い意味での全体性というものをもっているのかというあたりが、なお見極めつけられないというところがあるんです。

自然から乖離する祭り

上田 これは神道だけが努力してみても無理なところがあるて、いまは教育が国家というものを教えないでしよう、国際人になれということしかいわないわけでしょう、日本人になれなんていうことはだれも教えないでしょう。外国に行ったら、自分が日本人であるということとを嫌というほど思い知らされる。教育改革というのはいまの状態であるかぎり難しい。戦後五十年続いてしまっているわけでしょう。こういう世代の人で神道の考え方ができるというのはむしろ珍しいぐらいで、なぜそうなったのか、それを一人一人教えて下さい。

石井 ちゃんと理解しているかどうか、(笑) 怪しいです。
上田 いっ頃から。

石井 先程の阪本先生がおっしゃった共同体の祭祀の側面と、個人的な信仰の側面があるというのはよくわかるんです。その通りだと思っています。私が二分して考えて揺れがあると言ったのは、戦後の日本の社会変動の中で、共同体の信仰、祭祀を支えている基盤が猛烈に壊れてしまったわけです。特に地域社会なんていうのは、私は東京に住んでるわけでは壊れ

てるというのはよくわかるんです。町会ですらも壊れている、町会の会費を納めている家がうちの町会だと二割から三割ぐらいしかない。私も隣近所とほとんど付き合ってます。最近犬を飼ったので、犬を飼ってる飼い主とは話す機会がありますが、犬のことだけです。お互いの家の内情なんかこれっぽっちも話さないです。この犬がどういう犬でとか、(笑) その話だけでお互いに付き合おうという暗黙の前提があるわけです。「犬共同体」というのかよくわからないんですけど。

(笑)

かつては共同体の祭祀を支える実体があったし、個人の信仰を支える実体があったんです。いまは個人の信仰を支える実体はあるんだけど、地域社会や国家の祭祀を支える実体がかかなり壊れてきている。それは価値観の多様化を認めるとか、宗教に関していえば信教の自由とかそういうものがあって、そうすると共同体の祭祀はかなり神社神道に限定しても、建て前になりつつあるのではないか。実際にはお宮を支えている、あるいは普段神職の方々が腐心されているのは、個人のご利益だったり、会社が儲かりますようにというご祈禱だったり、外祭だったりして、しだいにそうした側面に重点が置かれていくようになりはしなかったか。神社本庁の大会などで理念として、あるいは、本来はこうなんだという建て前としての共同体の祭祀から、実体としての個人や具体的な

何かご利益に基づくようなところへだんだん移ってきたのではないか。神職の方の中にはむしろ個人の基盤のほうへグーッと引き寄せられてしまっていて、共同体の祭祀に思いを馳せられなくなった方も最近では出てきているのではないかという気がするんです。(笑)

今井 昔もそうだったんじゃないですか。

阪本 いやそれが、私もよくそういう話をするんですけど、面白くもないですけど……。

石井 急になったわけではないですね。

阪本 埼玉県の神職会は大正の御大礼に際して、新嘗祭と祈年祭との関係で、皇室でも祈年祭を大祭にしろと、それから祭日にしろということをいっている。なぜかというところ、当時埼玉県の神職から見ると、祈年祭を二月十七日やろうとする、要するに寒風吹き荒む寒い中で、出てくるのはその地域の名士だけで、それも意義もわからずただこうやってるだけです。それでこういう祈年祭というのは春祭りです。祝の祭りで大事といっても、現実にはピンとこないで、要するにお上がこれは神社の大祭ですからある意味ではやらざるを得ないと。ところがやってくる神主はもうそういう理念とかは大事だとは思っているけれど、その町の名士数人だけが参列して、あとは自分たちと何の関係があるんだと。

そもそも祭りというのは、その地域地域、あるいは日本列

島南北に長いですから、そこで例えば、春祭りにしたってそれぞれに意味があって、時も違っていた。ところがそれを画一化して、それがいま理念となって、例えば、神社界なんかでもその歴史的な実態を知らない。当時からそういう昔ながらの共同体があっただという意味ですけど、実際に日記を見ても社務日誌とか見ても、本当にこの例祭にもものすごい人が集まったかというところ、例えば、箱崎宮の例祭は新しい制度で、放生会は昔なりにやっていた。例祭としては国が決めたもので、葦津先生もよくいってたけど、例祭、官祭の日には、本当に県知事と数人、ところが私の祭りとされた放生会には氏子から何かからバーッと来た、阪本君、ここが戦前の国家神道が抱えていた一番の矛盾だよと。これで要するに共同体というものがある意味では形骸化し、またそこに住んでいる人のお宮の祭りというものを何となく形式化されたところ。神主にしてもこれは千種さんという前の菊池神社の宮司が言っているんですけど、ある大きなお社の例祭に行ったら、宮司さんが「どうもつまらんお祭りで、長々で皆様にご退屈様でした」と挨拶した。(笑) 一番大事なお祭りをこうしてお退屈様でしたみたいな、あとでいくら劳いの言葉にしたって何だと思ったと千種さん書いてるわけです。

実際にそういう神道というか、神社の祭りが戦前から尾を引いて、要するに義務として形式としてやってる部分。私は

「神社新報」から何度も祈年祭のことを書け書けといわれて書いて、もうそろそろ画一化はやめて、明治時代はできなかったけど、もう百年以上たつて新しい神社本庁の時代になって五十年もたつとしてゐるのだから、祭日も含めていろんな意味で本当に実情に合った、要するに本質を変えろとかいつてゐるわけではなくて、その本質を取り戻すためにもそういう努力を神社界が一丸となつてやってきたのかと。まさにそれが井上氏のいうある意味では言葉、あるいは行為としての教化なのに、相変わらずそこは……。

今井 いわゆる例祭、新嘗祭、祈年祭、そういう祭りをやることによって、その神社の意義が出て、だからこそ個人祈禱がくる。そういうような考え方を踏まえていかなければいけないのではないかと。なぜなら、例えば、祈年祭や新嘗祭は、戦前においては幣帛が上がるわけですね。

阪本 理想からいえばね。

石井 それには代表者が出ればいいんでしょう。神主さんが地域社会を全部代表してされてるわけですね。だからこそ、ほかのプライベートとか、賑わうお宮のお祭りがあつて、そのときに人が集まるわけですね。

櫻井 それで共同体のお祭りとか、共同体の神社という場合でも、前提としてあそこへ毎日参りに来たりとか、そんなことやつたかということからもう一遍考え直さないとけない

と思う。逆にいえばむしろそういう、例えば、私なんかその村の宗教ということしかあまりやつてないのでよくわからないけど、その村という中での宗教を見ますと、まずは氏神があると。それ以外に仲間て祀る神とか、あるいは齒の神様として個人的に、熱烈な信仰の対象というものはそれぞれにあつたわけ。しかしそれらも、例えば、ある時期には全部、ときには流行り廃りはものすごくあるわけですけど、放置されてしまひ、あまり見苦しいということ、氏神様の境内へ持込んだり、整理される。そういう中でも個人的にここは齒の神さんやと拝むようなこと、それは非常に象徴的に神社というものが、そういうものを全部含めての神社というものを意味するようになって。

西山 奉仕したあとも。

櫻井 しかしそうなると、この中でこのお祭りはこういう神社だからこうしなさいというような規制がかぶされていくと、そうすると非常に持っていたエネルギーが失はれていく面というものが逆に制限されるというような近代の歩みというものをもつてきているような。

西山 私は近代神社神道史のなかで、内務省が絡んでやつたこととのなかには、合祀のやり方などを見てみると、行政区画に合わせて強引にやつて、生活に根付いた人々の信仰を無視した側面が非常にあると思うのです。神社から信仰的

側面が削がれていくというか、これは最大の問題点だと思います。そうやってしまったものを回復するのは、これは容易なことではないです。理念的なものが非常にクリアーに出てきたことはあるかもしれませんが地域の人々の生活感覚から離れてしまった、そういう側面があると思います。柳田国男や南方熊楠が憂いたのは、そういうところだったと思います。まあ環境問題もあったと思いますが。理念的な要素と生活的な要素が乖離してしまったということ、それがいちばん大きな問題だと思います。新宗教の中にも乖離はあるのですが。

上田 乖離したという理解をせずに、もともとそうなんだと、人間というのは何も日本人だけでなく、いつも自分のことは考えてるけども、国家のことなんか考えていないんだ。西山 人間というのはもともとそういうところもあります。

上田 しかし、神道は神職がちゃんと国家の祭りはして、そのときに人を駆り集めようとせずに、平素は本当に個人のための信仰の神職として奉仕すればいいんだという、そういう割り切った考え方もできなくもない。ところがそれを公式の祭りに何しろ信仰心旺盛なる人をたくさん集めようという、本来できない相談を持ち掛けてるから問題なんだという、そういう考え方はできるんですか。

阪本 それもちろんだと思いますが、私が各地の神主

さんから聞くのは、自分自身がなぜ二月の十日日に春祭りをやらなければならないのかの説明つかないと、なぜ十一月二十三日に、これは秋祭りなのか何の冬祭りか、これがわからない。例祭もある意味ではいまでも旧暦でやっているところもありますけれど、明治以降新暦に直されたわけですから、要するに中秋の名月でもないのに、雨が降っていいようがこれは放生会、あるいは八幡宮の例祭として九月十五日にやらなければならない。要するに簡単にいえば明治以降の、特に太陽暦採用以降の、まさにそれが一番大事な祭祀であると同時に、祭り日はいつかという、祭日、これがもう欠落していて、要するに建物はどうであるとか、どれぐらいの財産を持っているかという、そういう一種の物質的というか、唯物的な明治の官僚の神社の見方というか、建物として見るというか、制度として見るという。

西山 役人発想ですね。

阪本 はい、そこで見事に太陽暦の施行で、結局実質的な祭りの大事さというものが、徐々に骨抜きにされてしまっていて、それがいまも……。

上田 私が東京に住むようになって一番腹立てるのは七夕、もう梅雨が終わるか終わらないか、空が見えるはずのないうきに七夕、何で東京のやつはこんな無神経なことを毎年やっているのだろうか。子供の教育なんか、これは七夕という子

供の七夕の印象が残らないときにやるでしょう、それと同じことやってるということです。

阪本 だから私なんか授業ではいつもそれをやるんですけど、三月三日の雛祭りだって桃の花なんか咲かないよと。五月五日の節句の菖蒲だって六月だよ、君達五月雨というのはどういう意味か、それで五月晴れといったらどういう意味かと聞いたら、いや、五月で天気の良い日ですという。そうじゃないんだと、六月の梅雨が五月雨で、その合間のもう夏を思わせるのが本来の五月晴れだと。だからそのときに春が終わって夏が本当にくる、そのときに無病息災を願うのだと。実際そういうことを説明できる神主さんというのは、若い人なんかでもどんどん少なくなってきたって、それで氏子さんたちの対応に、だからある意味じゃハウツウものの神道入門というのは売れるというか、よく見られるけど、その問題。それをいま国家の管理も何もないわけですから、もう一度、戻すというか、あるいは実情に合わせたお祭りとか意義とかいうものを、一人一人の神主さん、あるいは神社が考えて欲しい。

櫻井 それは阪本先生、そういう点でいけばあの神社界の中心にあるお伊勢さんが改暦後、すぐではないけれど九月の神嘗祭というのをまさに、おコメの熟成する十月というふうに大きく変えてるわけですから。そのところというのはそ

の説明からいえば、まさに現状に合った祭祀のあり方というものを模索されて、それを実際に展開したということがいえる。

阪本 約十年近く九月十七日できた、国の式部寮とかはもう決まったんだからと。ところが神宮のほうでは大・少宮司がお伺いをたてているんですけど、コメが取れないと、国のほうは早稲でやれという。そんな簡単なものじゃないというので、やっと十年ぐらいたってから一ヶ月ずらした。これなら神嘗祭できる、本来九月ですよ、それを一ヶ月ずらして実情に合わせている。それを伊勢の神宮ですらやっているわけですから。私はまさにいま、一宗教法人で国とは何の関係もなくなったときに、もう一度私はすべて明治を否定しろとかといってるわけではないのです、いい点ももちろんあることはあったと。けれども本質的な祭りの部分とか、氏子とか、崇敬者に対する部分は、お座なりに戦前の形のままある程度踏襲してきたしまっている部分はあるのではないかと。そこはもったときちっと神主さん自らが改革して、今井さんが言ったアピールというか氏子に、一人一人に呼び掛けていけば良いと思います。

西山 戦前はお上のご威光を背中に背負いながらだから、やっぱり多数の参加者があるでしょうね。でも、逆に、いま自主的、自発的に集まるとすれば大変な価値があります。で

すから、そういう意味では発想を切り変えるいいチャンスなのかもしれません。もちろん大変な努力が必要かもしれませんが。信仰によって自主的にそれが生まれるようなお祭りということですね、それはやっぱり素晴らしいことだと思うのです。

地についた教化の大切さ

阪本 あと一つ、私は神主さん、宮司さんが何でも一人で自分で決めてやってしまおうというところに無理があると思っているんです。越谷の久伊豆神社で去年、伊勢の御木曳きを招いたりしたけど、もう越谷じゅう本当に盛り上がっているんです。そのきっかけも面白い話で、十年前からずっと小さな勉強会を月一回やってまして、地域の青年とか商工会議所の人とか来てて、おれたちも何かやってみなければならぬいなあと、それでたまたま御遷宮というのでこれはどういうのだと。そうしたらうちでもこういうのを、越谷でもやってみたら面白いんじゃないかと。もう宮司もほとんどタツチしてないで、そういう人たちが要するに自分たちの町おこしだと越谷のあたりパーッと組織して。ただ、そこまでいくには十年とか二十年という長い道程がある意味では必要なんですけど。だから要するに宮司の一つの案とかサジュスションをして、それが実現できるような雰囲気その地域なりにつく

ること。私はむしろさっきおっしゃったように、宮司とか神主さんというのは地域に、要するに「犬共同体」でもいいです、話してこういうことですよと、あるいは来てくださいよと、そういう呼び掛けとか、あなたが言うアピールを一つずつこなしつつ、ようやく何か一つの具体的な形が見えてくるのではないか。単に理念とかノウハウだけ知っていればうまくいくということはあることあり得ないと思うし、ましてや新宗教の真似をしてね。

今井 新宗教の真似が一番危険だと思います。

阪本 したってうまくいかないしね、してもばかにされるだけだと思います。

西山 いや、井上氏が言ってるのも、機械的にそういうのを真似しろといっているのではないと思います。

阪本 もちろんそうでしょう。

今井 ただ、現状として真似をしたがりますよね。

阪本 言われると神主さんの中でも若いのも、こうすればいいというけど、絶対うまくいかないですよ。

西山 真似しなくてもいいけど、実態に合わないような祭日があったり、そういうのはもっと旧に復するというか、生活の中から出てきた自然な感覚があるわけですから、そういうものを尊重しないといけないのじゃないかな。生活から切れてしまっ、あまり遊離してしまっような形になっている

というのは問題じゃないでしょうか。

櫻井 ただ、その生活の共同性というような意識も、実態も、いまはなくなってきたということの現実そのものがあるわけです。

上田 単純な例でいえば、七夕を東京は七月にやっているけれど、これを八月に神社がやり始めて変えることができるかねえ。

阪本 でも旧暦でやってる大きな七夕というのはありますから、それは可能じゃないですか。

西山 例えば、私の地元の上福岡市では旧暦で八月にやっています。八月にやる場所は案外多いです。

石井 足並みが揃えばきっと。

西山 大丈夫じゃないですか。

石井 例えば、東京都の神社が一斉に、(笑) 今年から八月とかいい始めたらそれはそれでできるのではないのでしょうか。

今井 でも、七夕は神社よりは家庭教育でやってもらえばいいんじゃないかと。(笑)

櫻井 私はそれはむしろいまの時代では、先程の年中行事なんかを神社なんかが積極的にされてもいいんじゃないかと思うのです。

今井 逆に私が不安なのは、例えば、雛祭りとか、端午の

節句フェスティバルとか、七夕フェスティバルは、神社がやるのがいいのか、それとも家庭教育としてお母さんがお雛様を祭って。

上田 いや、お母さんのその教育を改めさせるために、七月にやるのはおかしいと。

今井 おかしいというキャンペーンを張るのはいいんです。ただ、神社で七夕行事を八月七日に神社に飾ってやることはたしていいかどうかということにちょっと疑問をもつということを。

櫻井 その疑問というのは何かこう……。

今井 本来家庭行事でやってほしいことを。

櫻井 ああ、やる場面での問題ですか、教学とかそういう問題じゃなくて。ただ、私は逆にいうと、いまの年中行事なんかむしろスーパ―へ行ったらくわかるんで、五月五日にちまきは売ってくれるでしょう。それから一月七日は七草パックで全部商品化されてるわけ。それを逆にいえば、家庭でそういうようなことかということ、逆にスーパ―のほうが準備してくれてる。しかし、こういう伝統をみんなでやるんだというの、むしろ神社なんかで本物が行われてるというようなイメージづくりというの、あってもいいのかなと。

今井 イメージづくりではないのですけど。

上田 イメージづくりという意味じゃなくて、神道の祭り

ぐらい季節と順応したものはないはずなんです。茅の輪くぐりを大祓にかけてやるなら、夏の夏越祓でやるなら、それと同じで日本人の生活に馴染んでるそういう民衆的なものを、なぜ神社が率先して、これが正しいのですとやらないのかという、そういう疑問で言ってるんです。

石井 私もそう思うのです。例えば、通過儀礼とか年中行事で、いま神社神道が何をすべきかと最初に申し上げたんですが、正しい一年のすごし方というか、それを率先して見せてほしい。

今井 そう、見せることはいいいけれども、ただ……。

石井 正しい生活のリズムをどこでも見られない。最近私たちもお正月をちゃんとすごしたいと思うのです。

今井 だから家ですぐすべきものを。

上田 だからその民衆がいまそういう知識をもっていない、間違った慣習がある。正月というのは海外へ、ハワイに行くもんだと思ってるやつがいっぱいいるわけですよ。だからそうでないんだということを、どうして指導しないのかと。

石井 日本人の伝統的な意味で、これが一年のすごし方ですというのを、お宮できちんと見せてほしい。

阪本 民間のそういう年中行事とか、あるいはお祭りも含めて率先して神社がまさにその一種の布教のセンターみたいに定着して、使命が終われば、それは元に戻ったわけ

だから。

今井 戻すということだったら賛成だけど。

上田 そういう知識もない、自覚もない人に、自ずからやるのを待つというのは、全然前提を無視してしまっている。自ずから起こるわけがないです。(笑)

西山 七夕なら構わないと思うけど、クリスマスまで神社でやってしまうと、神社の保育園でクリスマスやっちゃうとか。

上田 いや、そんな越境する必要はないですよ。(笑)

西山 いや、実態としてやってるの。

石井 そういう家庭もあるようです。

阪本 やってます。(笑) 要するに両極端に振れてる、あるいはまたがってるところをもう一遍結ぶ一つの手立てとして、祭りのこととか、神社の本質というものを、現実の社会状況とか生活に合わせて、変えられるものなら変えてそれを啓蒙していくとういうのが神職、あるいは神社の教化だし、またある意味ではそれが現代社会に対する神道のアピールといえますか、責任だと思えます。そういうことをやっていけば、私は山折哲雄さんなんか去年言われたように、仏教はもろろん神道なんて何の役にも立たない、屍をさらしているんだと。それも、ああ生きててよかった、生活しててよかったなということを、神道によって教えられると。口ではみんな

なえらそんなこと言ってますけど、みんな寂しいし、生活の実感を味わいたいわけです。それがある程度神社が提供してやる場になれば、それは期限付きでもいいと思うのです、家庭に帰るものならもともと戻る。ただ、そういうことも戦後五十年を経て五十一年目に入った神社界が、そろそろ撃って出てもいいのではないかと。それが責任でもあるということで、大体皆さん方の好意的な神社界に対するご意見は収斂できるのではないかとということでこの会の話は閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

(了)

(補記) 本座談会には、神道文化会の松山専務理事(東京大神宮宮司)及び今井達氏(神社新報社編集長)にも同席いただき、貴重な御意見をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

(阪本)

